

毎日新聞(2023.9.2)

「死」を意識、今を大事に生きる ノンフィクション作家・佐々涼子さん

◆今回のゲスト ノンフィクション作家・佐々涼子さん

<迫る>

◆今回のゲスト ノンフィクション作家・佐々涼子さん がん患者との交流や在宅医療の現場など「死」をテーマに取材、執筆してきたノンフィクション作家の佐々涼子さん(55)は今、闘病生活を送っている。2022年11月に悪性の脳腫瘍と診断されたのだ。体調が安定している時に、ジャーナリストの池上彰が聞く

がん患者との交流や在宅医療の現場など「死」をテーマに取材、執筆してきたノンフィクション作家の佐々涼子さん(55)は今、闘病生活を送っている。2022年11月に悪性の脳腫瘍と診断されたのだ。体調が安定している時に、ジャーナリストの池上彰さんと対談し「命」を見つめてきた体験で感じたことや、これからも作品を発表する意欲を示した。

池上 11年3月11日に発生した東日本大震災の大津波で被災した宮城県石巻市の日本製紙石巻工場の絶望から復興までを取材した佐々さんのノンフィクション「紙つなげ! 彼らが本の紙を造っている」の解説を私が執筆しましたが、このようにお話しするのは初めてですね。闘病中とお伺いし、驚いています。

佐々 悪性の脳腫瘍と診断され、抗がん剤治療を続けています。この病気の平均余命は2年に満たないと言われていました。22年11月ごろから頭痛がひどくなり、市販薬を飲んでいましたが、あまりの痛みには耐えられず病院に行きました。そうしたら医師から「悪性の腫瘍があります。残念です」と診断結果を伝えられました。さらに「すぐに手術を」と告げられたのです。

池上 大変な状態だったのですね。

佐々 開頭手術など3回の手術を受けました。入院中は半年で7回に。入院中はほとんど体を動かすことができなかった時期もありました。オムツをあててもらって寝たきりでした。

退院後は、訪問介護を受けたり、リハビリを続けたりの生活で。そしてどうにか、つえをつけて歩けるようになったのです。私のその姿を見た医師らは「(アニメ「アルプスの少女ハイジ」の登場人物で歩けるようになった)クララのようだ!」と、泣かんばかりに喜んでくれまして……。この時、私は恵まれているな、と実感しました。

池上 大きな手術を経験して「この世に戻ってきた」という感覚になると、突然、普段の景色がとてつもなく美しく感じるようになっていきます。

佐々 入院中に他の患者さんと夜空を見て「月がきれいだね」と話したことがありました。忙しい日々を過ごし、悩みを抱えながら暮らしていると「世界の美しさに気が付かない」と改めて思ったものです。実は、毎週のように行った検査の結果がいいと喜んだり、反対に具合が悪い時は「長く生かしてください」と頼みごとばかりしていたり。でも、お正月でしたね。富士山の雄大な姿を見て感動したのと、口にしたミカンの甘さ……。なぜだか涙が止まらなくなってしまっ。もうお願いごとをするのはよそう、と。今日も生かしていただいて、ありがとう。そう思うようになったのです。

池上 日々を生きるありがたさを改めて実感したのですね。</p></p>

佐々 発病前に「横浜こどもホスピス うみとそらのおうち」を取材していますが、代表理事の田川尚登さんの言葉が忘れられなくて。「ここに来る子どもたちは分かっている『今日は楽しかった』とよく口にしますが、次の約束をしないで帰ります」と。「今度はいつ会える?」などとは言わずに「今日はいい日だった」「今日は楽しかった」と、そう言って子どもたちはホスピスを後にするので。

私も先のことをあれこれ考えるよりも、今日を大事にしようと思いながら生きていこうと決めました。私の寿命は、もしかしたら長くなるかもしれませんが、ひょっとしたら短くなってしまいかもかもしれません。たとえどちらになっても「今日は楽しかった」と言えるように日々を過ごしています。

絶望の後、必ず希望がある

池上 病気が判明した時は、とてつもない衝撃を受けたとお察しします。

佐々 5年生存率は16%ぐらいだと医師から告げられました。最初は、絶望が来ました。開頭手術の後は自分の顔が変わったと感じてあせんとしましたし、抗がん剤治療の副作用で髪の毛が全て抜けてしまいました。絶望と衝撃が同時に来た感覚です。だからこそ、立ち直るのも早かったという感じがしています。それは「死んでいる暇がない」と言っているのかもしれませんが。「少しでも長く生きたい」とあえいでいる場合ではないという心境に至ったのです。

池上 終末期のがん患者との日々をつづった「エンド・オブ・ライフ」は「死」を扱っていますが、読めば読むほど、生きている素晴らしさが伝わってきます。死ぬまで私たちは生きている。生きている時間を一生懸命生きようというメッセージが伝わってきます。

佐々 終末期のがん患者の方は、必死になって生きています。大勢の患者の方や家族を取材して、メモや録音した声を書き起こしてきました。その中には「冷蔵庫に昨日のご飯が残っているよ」という会話が最後の言葉になった方がいらっしゃいます。このような出来事に触れることによって、最後の瞬間まで人は生きるのだと改めて実感しました。被災した製紙工場の復興までの過程や、外国で亡くなった人の遺体や遺骨を、遺族の元に届ける仕事に密着したことを通して、私はこう考えるようになりました。絶望の後に来る希望がある——。私はそう信じています。

■人物略歴

佐々涼子(ささ・りょうこ)さん

1968年、神奈川県生まれ。日本語教師を経て、フリーライターとして活躍。2012年、「エンジェルフライト 国際霊柩(れいきゅう)送還士」で第10回開高健ノンフィクション賞を受賞。他の著作に「紙つなげ！ 彼らが本の紙を造っている 再生・日本製紙石巻工場」「エンド・オブ・ライフ」などがある。

池上 人は自分がいつ亡くなるのかは分かりません。だからある意味、ダラダラと日々を過ごしてしまうのかもしれない。逆に限られた人生だと分かると、より良く生きようとするのでしょうか。

佐々 そう思います。人生は長さではない。生きている長さで人の幸せは測れないのではないのでしょうか。どんなに短くても、生き抜くことが豊かで幸福なのだと思います。生きている時の「質」と表現すればいいのでしょうか。

池上 多くのノンフィクション作品を発表しましたが、ご自身が病を得たことで考え方などに深みが出てきたのではないかと想像します。

佐々 「エンド・オブ・ライフ」では、自宅がある横浜から、京都の診療所に何回も通い、在宅医療を受ける患者の方と家族の取材を続けました。この診療所で働く看護師で、200人を超える患者をみとった私の友人がんと診断されたのです。彼と残された日々を共に過ごし、そして亡くなる日もそばにいました。みとることはこういうことなのか、亡くなることはこういうことなのか——。それを間近で見届けました。

亡くなりゆく人は、残された人々の人生に影響を与えますし、人生が有限であることを教えてくれます。そして、どう生きるべきなのかを考えさせてくれます。そう考えると死は悲嘆だけではなくて、すごい贈り物をいただくのだと私は考えるのです。

病気になったことで初めて分かることもあります。50代で自分が訪問介護やリハビリなどのお世話になるとは思っていませんでしたから。今までは気が付きませんでした。自宅マンションの駐車場には、訪問介護の車が3、4台並んでいることがあります。ですから介護サービスを受けている方が身近にいる。また、車で付近を走っていると斎場も目に付きます。みんな、いつか死ぬ。それを改めて実感しました。それは私に限ったことではなくて、シニア世代に、いつかは介護などのお世話になるという認識が浸透してきて、社会の価値観が少しずつ変わってきたとも感じています。

池上 そのようなノンフィクションライターとしての視点は、どのように育まれたのでしょうか。

佐々 外国で亡くなった人の遺体や遺骨を遺族の元に届ける「国際霊柩(れいきゅう)送還士」という仕事があると知り、取材を続けました。外国での事件や事故によって命を落とされた遺体が飛行場に到着すると、人々の視線はひつぎに集中します。「日本にやっと戻ってこられた」といった感情とともに。でも、私は遺体を生前の姿に近づけようと懸命に修復して遺族の元に届ける国際霊柩送還士の姿を見ているのです。いわば、黒衣を知りたいという動機でしょうか。

池上 見えない人を「見る」ということですね。

佐々 ノンフィクション作家は、その視線を意識する仕事だと思っています。

池上 佐々さんは、東日本大震災で被災した宮城県石巻市の製紙工場が復興するまでの経緯を取材しています。当時、私はある出版社から新書を出す予定だったのですが、製紙工場が被災して紙が手配できないと言われてまして。新聞も紙で成り立っています。その時、製紙工場働いている人々がいるから本を出せる、という当たり前のこと、そのありがたさに気が付きました。

佐々 本当に知らないと分からないことってありますよね。そして、製紙工場に関わっている人々も、自分たちのすごさに気が付かないで業務に携わっているのです。大災害があった時、人々はどんな仕事をするのか、また、やらずにいらなかったのはどのようなことだったのか。その姿を私は知りたい。

そして事実を知ってしまうと、書いて残さなければという衝動が抑えきれなくなります。知ったことを、何とかして皆さんにお伝えしたい、という気持ちが膨らむのです。

池上 スムーズにページをめくっていける本は、紙の手触りがいいためなのかと分かりました。日ごろは気が付かないところで、力を発揮している人がいるのです。でも、ノンフィクションは発

表できる媒体が減っています。危機感はありますか。

佐々 ノンフィクションの作品は減ったとしても、なくならないのでは。私から見れば、社会の問題は山積みで、どこから手をつけていいのかわからないぐらい。草ぼうぼうの状態です。次世代に悪いものを残さないように、情報を発信して問題を刈り取っていかねばと思っています。世代によって視点が違う問題もあります。超高齢化社会になり、シニアの視点から見たらこういう問題があると知ってもらうことが、より大事になってきます。ノンフィクションを書かないと、そして読まずにはいられないという時期がやってくるのではないのでしょうか。

インターネットでの情報は流れては消えていきます。また、スマホのアプリで情報を保存したとしても、いざ読み返そうとすると探せないこともあるでしょう。どうやって記憶に残すのかと考える時期も来ると思います。SNS(ネット交流サービス)を使って、文章や音声を次世代に伝えていくことはできないのではないのでしょうか。そう考えていくと、紙という媒体はなくならないという結論に至るわけです。もちろん、この予想には、祈りのような気持ちを込めています。

池上 お話をお伺いしていると、病を得て知り得たことをノンフィクション作品として書きたいのではないのでしょうか。

佐々 タイムリットがあるので、何としても書きたいですね。

池上 文章を紡ぎ出すことに支障はあるのでしょうか。

佐々 執筆はパソコンを使っていますが、左半身に少しまひが残ってしまっていて。最初は全くキーを打てませんでした。今は左手の指を頑張らせて動かして、ブラインドタッチができるように練習しているところです。

また、軽い脳機能障害があるので、いろいろなことを同時並行で進めることが苦手になって。それでも私は、この病気になると、こういうことが起こると知ってしまった。それを誰かに伝えたいという気持ちが膨らんでいるので、記録に残したい。私の今の願いです！

池上 執筆活動にはご家族の支えもあります。

佐々 夫は海外勤務が多く、長い間、単身赴任でした。連絡があるのは正月と暑中見舞いぐらい。まるで遠い親戚のような関係でしたが、私の病気が診断されてからは、いつもそばで支えてくれています。ある意味、驚きました(笑)。2人の息子も週末には、孫を連れて自宅に来てくれます。私は、女性が社会に出て働くのはいいことだという時代に現役でしたから、子どもの面倒はあまり見てこなかった。それでもいい子に育ててくれて感謝しています。そして思うのです。本当に、こんなに幸せでいいのって。

池上 執筆には口述筆記という方法もあります。それをたたき台にして、原稿を整えていけば負担が軽くなるかもしれません。佐々 なるほど、そのような方法もありますね。ただ、私は自分のことよりも、他の人が手掛けていることが好きなので。実は自分のことを書けるのだろうかという不安はあります。

池上 自分を他人として見つめることはできませんか？佐々 できるはず、です。人生には限りがある——。それを皆さんに気が付いていただくことが、私の大事な役目だと信じています。

【構成・瀬尾忠義】

お礼申し上げます 池上彰

余命宣告を受けた患者たちは、何を思い、どんな生き方を選択するのか。そんな究極の現場で取材を続けてきたノンフィクション作家が、自らも悪性腫瘍で平均余命を知る。そのときご本人は、どんな気持ちで日々を過ごすことになったのか。佐々さんがご病気になったと知って、ぜひ話を聞きたいと思い、実現したインタビューでした。明るく元気な佐々さんに会い、より良く生きることの意味を教えてもらった気持ちでした。次はご自身を見つめた作品を、ぜひ。

